

あさいますおの基礎資料

石崎 尚・編

資料1 あさいますお年譜

()内は典拠となるガリ版誌もしくは文献を示す

「※予告」はガリ版誌での告知のみで実施後の報告がなく、写真記録などでも確認できないものを示す

「年齢」は当該年の6月30日時点での年齢を示す

「学年」は当該年の4月から翌年3月までの学年を示す

年	年齢	学年	月日	事項
1942			6月30日	父・伊吉、母・夏子の第2子(長男)として長久手村長久手大字岩作字東島に生まれる
1955	13	中学1年	3 4	長久手小学校を卒業 長久手中学校に入学
1956	14	中学2年		北川民次の著書「絵を描く子供たち」を読んで感動し、民次に手紙を書く(『えんとつともぐら』2号)
1957	15	中学3年	冬	「町」に対するレジスタンスの姿勢として下層の「田舎侍」というイメージを作り上げる(『Oからの創造No.1蜂起せよ! 底点工作者』)
1958		高校1年	1月 3月 4月 6月 8月	日本児童画研究会(会長は浅利篤)に入会(『尖底点』2号) 長久手中学校を卒業 長久手高校に入学 パウル・クレー論を執筆 宮沢賢治論を執筆
1959	17	高校2年	3月25日 11月1日 冬	「らくがき」を発行する 自作の彫刻、絵画とともに写真に写る 鼻の手術をし、その体験を元に「ゼロ 墜落する黒い太陽」を発行する
1960		高校3年	3月頃 6月頃 9月26日 10月18日 11月1日 11月18日	美術部の機関紙「柿の種」創刊号が発行される。2年生のあさいは題字とカットを担当 名古屋での安保闘争デモに参加 「現代を見る目」1号を発行(高校の「現代を見る目」研究会の機関紙) 「現代を見る目」2号を発行 「現代を見る目」3号を臨時発行(社会党の浅沼委員長刺殺事件を受けて) 「現代を見る目」4号を発行
1961			1月8日 1月18日 1月21日 3月11日 3月21日 3月 4月8日 4月9日 6月 6月26日 夏 11月	愛知用水の工事現場でスケッチをする。現場通いは6月まで続く(スケッチブックの日付、「現代を見る目」7号) 「現代を見る目」5号を発行 「現代を見る目」6号と7号を発行 瀬戸市立中央公民館に「どろんこ会展」を見に行く途中、朝鮮の子供たちに出会う(『カッパ通信』3号) 愛知県愛知郡日進村の中日青葉学園を訪れる(『現代を見る目』8号) 長久手高校を卒業 「現代を見る目」8号を発行 「柿の種」(長久手高校美術部の機関紙)を発行 「月刊ていへん」6月号に掲載される(『月刊ていへん』6月号) 浅利篤に児童画研究に関する手紙を出す(『尖底点』第2号) 約一か月にわたり岩手県の山村や漁村を放浪する(『美術教育通信 えんとつともぐら』2号、「どらむかん」2号) この頃までに「底辺の会」を退会
1962		20	1月30日 3月10日 3月15日 4月 7月1日 7月25日 8月5日 8月下旬～9月上旬 8月28日 10月15日 11月24日	『Oからの創造 蜂起せよ! 底点工作者』を発行 「底辺の子供たち I あなたは触覚するか 日本にいる朝鮮の子供についてのスケッチ」を発行 朝鮮人の子どもたちに初めて手紙を出す(『カッパ通信』2号) カッパ・グループを結成 「カッパ通信」1号(朝鮮の子供と日本の子供によるカッパ・グループの作文集)を発行 「尖底点」1号を発行 「尖底点」2号を発行 約二〇日間、三池炭鉱内部に潜入(『黒い核』) 三池炭鉱から金聖徳に手紙を書く(『カッパ通信』2号) 「黒い核 三池の子供作文集」を発行 たけのこ子供会(瀬戸市立図書館)で児童画教室を開始する。以後、毎週土曜日に開催(『えんとつともぐら』4号)
1963		21	1月5日 1月20日 2月9日 3月中旬 3月23日 3月24日 3月30日 5月頃 7月 7月27日～29日 7月27日 7月28日 8月初旬 8月頃	「美術教育通信 えんとつともぐら」1号を発行 「美術教育通信 えんとつともぐら」2号を発行 「美術教育通信 えんとつともぐら」3号を発行 「カッパ通信」2号を発行 児童画教室が最終回を迎え、敗北意識を抱く(『えんとつともぐら』4号) 東山植物園で春の一日を楽しむ会を開催(『カッパ通信』2号) ※予告 「美術教育通信 えんとつともぐら」4号を発行 「カッパ通信」3号を発行 「尖底点」第5号を発行 瀬戸市民会館で「あさいますお個展」を開催(『尖底点』5号) ※予告 瀬戸市民会館にて「尖底点を批評する会」を開催(『尖底点』5号) ※予告 瀬戸市民会館にて「集団討議 美術と社会の接点を求めて」を開催(『尖底点』5号) ※予告 岩手県岩手郡松尾村の前森山集団農場を訪れて四日間滞在、農場で共に働く(『尖底点』6号) 森秀人の紹介で小原嘉一と会う(『ゲゲ』3号)

年	年齢	学年	月日	事項
1963			9月 10月15日 11月 12月23日 12月頃	この頃からカッパ・グループの活動をなまけるようになる(『カッパ通信』2号) 『尖端』6号を発行 『思想の科学』11月号に「底点の会への招待」が掲載される 瀬戸市民会館にて底点の会の集会を開く 『アンドロメダ』1号を発行
1964		22	2月 2月頃 3月5日 4月3日 4月 4月中旬 5月頃 5月頃 6月 7月 7月 7月 7月 7月頃 8月9日 8月 8月 8月30日～9月5日 9月 11月 12月24日～25日	毎週日曜日の19時から喫茶店No.9で底点の会の集会を開くようになる(『アンドロメダ』2号) ※予告 『アンドロメダ』2号を発行 『アンドロメダ』3号を発行 瀬戸市民会館2階の3部屋で「第1回縄文祭」を開催(『アンドロメダ』5号) 『アンドロメダ』4号を発行 東京から美術記者が取材に訪れる(『アンドロメダ』5号) 『アンドロメダ』5号を発行 毎週日曜日の19時から瀬戸市追分町のX画廊でアンドロメダ集会を開くようになる(『アンドロメダ』5号) 瀬戸市追分町のX画廊を追放され、以後、アンドロメダの集会を瀬戸市仲切町の小高い丘で開催するようになる(『アンドロメダ』6号) 『アンドロメダ』6号を発行 『美術教育通信』11号を発行 『どらむかん』1号を発行 岐阜市にて全裸街頭行進を行う(『アンドロメダ』8号) 現代子ども研究会を設立(『どらむかん』1号) 瀬戸市の宮前広場にて、「レッドANDブルー実験展」を開催。記念橋の上で男が檻に入る(『アンドロメダ』7号) 『アンドロメダ』7号を発行 『24時間男女カズメ精神・肉体ゲキツ会』を開催(『アンドロメダ』8号) ゼロ次元が主催した日本超芸術見本市に参加 『アンドロメダ』8号を発行 『どらむかん』2号を発行 瀬戸市民会館でもぐもぐするおふ第2回児童画展を開催(『どらむかん』2号)
1965		23	2月 2月19日～2月21日 2月21日 2月28日 3月24日～4月3日 3月末 4月頃 5月18日 5月28日～30日 6月 7月1日 7月26日～8月3日 8月2日 8月9日～19日 8月25日～31日 9月 10月16日～17日 11月7日～10日 11月頃 11月26日～28日 11月27日 12月5日 12月29日	『アンドロメダ』9号を発行 瀬戸市民会館にて「あさいますお第2回絵画展」を開催(『アンドロメダ』9号) ※予告 瀬戸市民会館にて現代美術問題討論会を開催。内容は「記号・暗号・呪文をめぐって」(『アンドロメダ』9号) ※予告 瀬戸市民会館にて現代美術問題討論会を開催。内容は「芸術における(資本論)とは何か?」(『アンドロメダ』9号) ※予告 内科画廊での松澤宥の個展に会期中毎日足を運び、最終日近くに松澤と会話する(『松澤宥自筆年譜』「機関」13号松澤宥特集、海鳥社、1982年、52頁) 東京都調布市の水木しげる宅を訪れる(『アンドロメダ』10号) 松澤宥の個展の後に諏訪の河西画廊を訪れ、個展開催中の伊藤智子と知り合う(前掲『松澤宥自筆年譜』52頁) 愛知県体育館で行われたジョフレ対ファイティング原田戦に興奮する(『アンドロメダ』10号) 瀬戸市民会館二階にて「ゲゲまんが展」を開催(『アンドロメダ』10号) 『アンドロメダ』10号を発行 『月刊漫画ガロ』7月号にあさいますおについて水木しげるが書いたエッセイが掲載される(『ガロ』7月号、169頁) 長野県諏訪市にて「第2回縄文祭」を開催(『アンドロメダ』11号) 『日本読書新聞』に「アンドロメダ」が掲載される(『日本読書新聞』1318号) アンデパンダン・アート・フェスティバル(長良川アンデパンダン展)を安部健司、伊藤智子らと見に行く 郡上八幡で郡上おどりに参加したのち、いかだで長良川を下る。31日に岐阜の長良橋に到着(『アンドロメダ』11号) 『アンドロメダ』11号を発行 瀬戸市の宮前広場で「あいらぶふう展」を開催(『アンドロメダ』11号、『ゲゲ』1号) 伊勢市を訪れ、貸本屋の調査などを行う(『どらむかん』3号、『ゲゲ』1号) 『どらむかん』3号を発行 瀬戸市民会館であさいますおゲリラ展を開催(『アンドロメダ』11号、『ゲゲ』1号) ※予告 瀬戸市民会館で「ゲゲ詩・排泄の夜」を開催(『ゲゲ』1号) 瀬戸市の宮前橋で「街頭演劇・最後のバンサン会」を開催。この模様を吉岡康弘が取材し雑誌「宝石」に掲載される(『宝石』1966年2月号、光文社/『ゲゲ』1号) 瀬戸市の宮前橋および瀬戸川にて、ビニール袋にうずくまる(『ゲゲ』2号)
1966		24	1月上旬頃 1月3日 1月9日 3月2日 4月10日 5月11日 5月20日～22日 5月22日 7月25日～28日 7月31日 9月 9月24日～27日	瀬戸市の宮前橋で「X氏の優雅な制作」を開催 テレビ塔が見える歩道で寝転がり埋葬式を行うが、警官に道交法違反だと告げられたために立ち去る(『ゲゲ』2号) 名古屋・栄の交番前の歩道で「詩劇1月9日」を開催(『ゲゲ』2号) 『ゲゲ』2号を発行 名古屋・栄のオリエンタル中村前歩道で「詩劇ゲゲ・アナタの顔がない足がない」(『ゲゲ』2号、3号) 小原嘉一があさいを来訪し、5日間滞在。別れの夜にゼロ次元のことやアンドロメダのことを語り合う(『ゲゲの下書きと思われるノート』) 瀬戸市民会館二階にて「ゲゲまんが展」を開催(『ゲゲ』2号、『ゲゲの下書きと思われるノート』) 瀬戸川にて「どろ！詩劇」を開催(『ゲゲ』2号) 愛知県文化会館美術館での「ゼロ次元展」に岩田信市らと参加 海水浴中の事故で頭部を岩に強打し午前9時30分頃、伊東市八幡野橋立海岸にて死去 ゼロ次元の加藤好弘が編集を代行した「ゲゲ」3号が発行される 加藤好弘の主催による「あさいますお道作品展」が瀬戸市民会館で開催され、前夜祭やゲゲ街頭行進儀式が行われる(『ゲゲ』3号)

資料2 あさいますお文献目録

- ・この文献目録は編者が確認できたもののみを掲載した。
- ・各項目は発行年順に並べたが「1. あさいますおが発行に携わったノートおよびガリ版誌」については冊子のシリーズごととに並べたため時系列が前後するものもある。
- ・「2. ガリ版誌以外での自筆文献」については56～65頁全文を再録した。

1. あさいますおが発行に携わったノートおよびガリ版誌

『(作文集)』1954年
『微笑の聖者パウル・クレー—天使の誰かの側に横わるパウル・クレーにささげるために—』1958年6月
『微笑の聖者についてのノート—宮沢賢治—』1958年10月頃
『らくがき』1959年3月25日
『ゼロ 墜落する黒い太陽』1959年頃
『柿の種』1960年3月頃
『柿の種 Lakugaki NOTE 美術部』1961年
『Noto Rakugaki 美術部資料集No.1』1960年6月25日
『柿の種 長高美術部機関紙』1961年4月9日
『現代を見る目』1号、1960年9月26日
『現代を見る目』2号、1960年10月12日
『現代を見る目』3号、1960年11月1日
『現代を見る目』4号、1960年11月18日
『現代を見る目』5号、1961年1月18日
『現代を見る目』6号、1961年1月21日
『現代を見る目』7号、1961年1月21日
『現代を見る目』8号、1961年4月8日
『0からの創造 No1 蜂起せよ！ 底点工作者』1962年1月30日
『底辺の子供たち I あなたは触覚するか“日本にいる朝鮮の子供についてのスケッチ”』1962年3月10日
『カップ通信』1号、1962年7月1日
『カップ通信』2号、1963年3月
『カップ通信』3号、1963年5月
『尖底点』1号、1962年7月25日
『尖底点』2号、1962年8月5日
『尖底点』2号(暫定B版)、1963年1月15日
※2号と表記されているが、2号とは異なる内容
『尖底点』5号、1963年7月30日
『尖底点』6号、1963年10月15日
『黒い核』1962年10月15日
『美術教育通信 えんとつともぐら』1号、1963年1月5日
『美術教育通信 えんとつともぐら』2号、1963年1月20日

『美術教育通信 えんとつともぐら』3号、1963年2月9日
『えんとつともぐら』4号、1963年3月30日
『美術教育通信』11号、1964年7月
『どらむかん』1号、1964年7月
『どらむかん』2号、1964年11月
『どらむかん』3号、1965年11月頃
『アンドロメダ』1号、1963年12月頃
『アンドロメダ』2号、1964年2月頃
『アンドロメダ』3号、1964年3月5日
『アンドロメダ』4号、1964年4月
『アンドロメダ』5号、1964年5月
『アンドロメダ』6号、1964年7月
『アンドロメダ』7号、1964年8月
『アンドロメダ』8号、1964年9月
『アンドロメダ』9号、1965年2月
『アンドロメダ』10号、1965年6月
『アンドロメダ』11号、1965年9月
『ゲゲ』1号、1965年12月20日
『ゲゲ』2号、1966年3月2日
『ゲゲ』3号、1966年9月15日
『(ゲゲの下書きと思われるノート)』1966年頃

2. ガリ版誌以外での自筆文献

『亀裂の谷間』『月刊ていへん』第13号、1961年6月号、底辺の会、2～5頁
『底点の会への招待』『思想の科学』No.20、1963年11月号、35～38頁
『アンドロメダ運動について』『三文評論』1965年4月号、三文評論社、29頁
『アンドロメダ 日常的行為を芸術行為に』『日本読書新聞』1318号、1965年8月2日、2面

3. あさいますおについて言及のある文献(単行書)

森秀人『遊民の思想』虎見書房、1968年、42～43頁。
末永蒼生『生きのびるためのコミュニケーション』三一書房、1973年、37～41頁。
伊藤益臣『底点の会—その祭り』思想の科学研究会・編『共同研究 集団』平凡社、1976年、402～407頁。
山下智恵子『掌の息』『砂色の小さい蛇』BOC出版部、1978年、147～177頁。 ※あさいとの交流をベースにして書かれた小説のため、脚色を含んでいる。
西島一洋『浅井ますお追悼冊子—一九九〇～九二』1992年10月29日 ※表紙に全13冊(13巻)とある

が実際に発行されたのは1冊のみ
吉岡康弘『アヴァンギャルド60's』新潮社、1999年、
288～289頁。
水木しげる『カラコロン漂泊記』小学館、2000年、
177～179頁。
黒ダライ児『肉体のアナキズム 1960年代・日本美術
におけるパフォーマンスの地下水脈』
grambooks、2010年、337～352頁。
水木しげる『ねばけ人生』筑摩書房、1986年、211～
213頁。
『アイチアートクロニクル1919-2019』愛知県美術館、
2019年3月。
高野慎三『神保町「ガロ編集室」界限』筑摩書房、2021
年、171～177頁。

4. あさいますおについて言及のある文献(定 期刊行物ほか)

武良茂『ロータリー 鳥』『月刊漫画ガロ』7月号、青
林堂、1965年7月1日、169頁。 ※武良茂は水
木しげるの本名
『毎夕新聞』3756号、1965年7月30日、1面。
『信濃毎日新聞(中南信版)』29993号、1965年8月1
日、A(14)面。
「波状線」『南信日々新聞』1965年8月3日3面。
吉岡康弘「あるエネルギー“ニセモノの平和”はおれ
たちの敵」『宝石』第2巻第2号、1966年2月号、光
文社、頁数不明。
水木しげる「日録」『日本読書新聞』1373号、1966年9
月12日、8面。
水木しげる「日録」『日本読書新聞』1375号、1966年9
月26日、8面。
伊藤益臣「裸の底点工作者—あさい・ますおのこと
など—」『思想の科学』No.75 1968年5月号、思想の
科学社、1968年、73～80頁。
ヨシダヨシエ「単独行為者の超劇場」『美術手帖』第
355号、1970年12月号、美術出版社、49～63頁。
中武久「かまぐれ祭の実現まで」『新日本文学』
No.300 1972年7月号、新日本文学会、1972年、93
～98頁。
松澤宥「松澤宥自筆年譜1922～2022」『機関』13、海鳥
社、1982年9月25日、52頁。
岩田信市「『ゼロ次元』発生、活動、パワーの根源」
『裸眼』3号、美術読本出版、1986年12月1日、14頁。
加藤好弘「故郷名古屋の栄町で芸術テロリスト全裸
集団『ゼロ次元』は誕生した」『裸眼』3号、美術読本
出版、1986年12月1日、6頁。
水上旬オーラル・ヒストリー、坂上しのぶによるイ
ンタビュー、2009年3月21日・3月22日、日本美術
オーラル・ヒストリー・アーカイヴ(URL: [https://](https://oralarthistory.org)

oralarthistory.org)
ししお「美術の裏街道をゆく 7月」『地熱の荒野しん
ぶん』7号、トトち舎(高橋綾子)、2010年7月7日、
2頁。
加藤好弘オーラル・ヒストリー、細谷修平と黒ダラ
イ児と黒川典是由るインタビュー、2015年8月21
日・8月22日、日本美術オーラル・ヒストリー・アー
カイヴ(URL: <https://oralarthistory.org>)
岩田信市オーラル・ヒストリー、細谷修平と黒ダラ
イ児と黒川典是由るインタビュー、2015年8月29
日、日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ
(URL: <https://oralarthistory.org>)
末永蒼生オーラル・ヒストリー、細谷修平と黒ダラ
イ児と黒川典是由るインタビュー、2019年11月30
日、日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ
(URL: <https://oralarthistory.org>)

資料3 自筆文献再録

亀裂の谷間

I

ちいちゃな、ちいちゃな路地はまっすぐに続いている。

気のおくなるほど無限にとおく。

この路地はどこへつきぬける通路なのか。腹のふくれた妊婦がとおった。ほっぺの赤い子供たちがキャラメルを口にはおりこみながらとおった。花束を持たない若い娘が不安そうに目をひっこませてとおった。

口をニタニタゆがめながらすっかり疲れ切った労働者がとおった。オスのヤセ犬がメスのデブ犬を追かけてとおった。

そしていま、ボクが骨ばかりの四十五キログラムの体に、三百五十グラムのスケッチブックをかかえてとおろうとしている。

路地のでっぺん、青空には、さるまたがぶらさがっている。

このまっすぐ続く路地は一つの境界線
深い深い谷間。

向って右にY陶器会社の近代的な建物。

向って左に屋根が13°かたむいたうすよれたちいちゃな民家。奇妙なコントラスト。

無表情につつまつ、巨大な建物をボクは見つめている。向い側の暗い裸電球の下で陶器の破片を集めつづける人々をぎょう視している。

ボクが足をふみ出したとたん陶器工場の二階のまどがパァーとひらかれ一人の男が顔をニュと出した。ボクは直感した。ボクは直感した。〈工場主だナ〉ボクは男の鼻が赤いのをとっさにみてとった。〈赤鼻か〉ボクはさからわなかった。手をあげて笑いを送った。しかし工場主は笑わなかった。無表情にボクを見つづけるばかりであった。ボクのほほえみは無表情な工場主の顔につきあたり、はねかえり、ボクのもとに空虚にかえってきた。その時急に工場主の足の下、一階の仕事場がさわがしくなり、巨大な建物のちいちゃな入口から仕事に疲れた労働者がわいわいがやがや言いながらとび出してきた。○時○分、^マ尽休み。

若い女と男とはバレーボールに狂騒し、頭の中がからっぽになるまでボールを空に向ってパスしつづける。何もかもわすれてしまいたいのだ。倦怠・ため息。しかし彼らは組織された組合を持つ。人間疎外を回復する唯一のケイキとなる組合を。

しかしもう一方の世界ではパスしたボールがむこう側のかたむいた屋根のでっぺんにあたりコロコロ

ところがりおちるのを子供の手がしっかり受けとめる時、母はもう一人の子供と共にほそとたたみの上にすわっている。無限の沈黙。

母は少々いたんだ肺に深く空気を流しこみ、ためいきまじりにはき出す。

〈いつまでたっても同んなじなんだ。〉

突然子供は路地にとび出し友を呼びに走る。「ケンちゃん！」

“ボクは知っている。それからあと、子供がすすけて黒ずんだ板べいに“バカヤロー”とらくがきしたのをバカヤローの下にぶたが一びきとぎれとぎれの線で描いてあった。

ボクは歩くきながら見た。路地に沿って、まっすぐにつづく板べいに無数のらくがきがかかっているのを。それはストレートな不満のバクハツ。抑圧されつづけている者の何物かに対する反抗。悪口とセクシャルな快感と無意味な絵。路地の中ほどに便所があり、便所の壁に女の性器がスピード感にあふれる線でらくがきしてあった。うかばれないものの一時的うさばらし。呪いの言葉の理論化されない叫びのままのさげび。

板べいに骨が歯をかちかち言わせ笑っていた。

ボクは思う。階級の発生以来、無数のかずかぎらないらくがきが便所の壁や天井板のすみっこに、また巨大な宮殿の門前にかかれては消え、かかれては消えて行ったことを。

蟹は怒りと不満をぶくぶくと泡にしてはき出す。水底にしずんじゃって以来水面にうかんだことのない泥土のような下層民衆はかのようにぶくぶくとはかない泡を作っては消え、作ってはきえてゆく。

らくがきには署名がない。らくがきは下層階級すべての人人の声だからである。

—十円ひろったよ。—

そう言って、てのひらをそおとひらく少女。向い側の白いコンクリートの建物に小便をかける7才の少年。ボクはこうした少年や少女を見る時、この無限に続く路地、境界線に現代日本の暗い暗い谷間、うめてもうめてもばっくりあいたままの亀裂の谷間を思わずにはいられない。

この亀裂の谷間はボクたちに何を語ろうとしているのか。彼の言わんとすることに耳をかたむけよう。そして亀裂の深部まで掘り起こし、分析し、さらに理論化、組織化の方向に向おう。そこに至るには底辺の会の今後の方向を検討し考えてみる必要がぜひともある。

II

底辺ブームの内部に巣くう欠陥を指摘することからまず問題の糸口をつかもう。

底辺ブームは底辺階級を讚美的に、あるいは興味本位にしか見ない傍観者の立場を内包する。底辺ブームは底辺をあばきたて、讚美し、あるいはケチをつけ政治悪を口だけでのしり、そうすることによって金もうけをする作家や評論家やジャーナリストを輩出させている。生活の少々安定した読者はそうした人の書いた本を読んでなるほどこんなみじめな生活もあったのかと同情(ギアンのな)を起すがただそれだけのこと。底辺を温存する資本主義そのものを否定するという姿勢にまで至らない。事実上は資本主義黙認の態度を自分では知らずにとっているのである。独占資本家とマスコミと読者が共犯者となり、底辺を温存し、くいものにしその上に自己の安易な生活を確保しようなんて魂胆を持っているとしたら大変なことである。しかし常にこうした危機が底辺ブームの底には流れているのである。独占資本が作り出すブームはブーム以外の何者でもない。これでは底辺は底辺としておきすてられる可能性にある。こうした底辺は「底辺の会」にもないとは言えない。しかし「底辺の会」の強みは底辺に生きる人々が主体的に考え、問題を提起してきたことにある。

例えば「底辺の会」編「ドヤ」。これは従来までの外部からののぞき見の実態観察にとどまらず内部からの、つまりドヤ体験者の主体的な発言として貴重である。底辺の人々のホンネをインテリや見物づきなジャーナリストや探検家が必死にとらえようとしても不十分なホンネをひき出すにとどまる。

底辺に生きる人間が主体的にホンネをかざらず誇張なしで語る時、真実の声がとび出す。しかしそれは強味だが同時に弱みでもある。告白の列記、生活綴方的経験主義におちいる危険性が充分あるからである。

ていへん No10号の編集後記は底辺の会の自己批判がのっている。

「底辺の会は決して底辺を守る会ではない。むしろ底辺みたくないものをなくする会である。けれども実態ばかりをうったえても底辺はなくなりはない。底辺をなくするためにはそのためのアイデア、行動のためのアイデアがなされなければならない。」

まったくそのとおり。底辺の実態をこれでもかこれでもかと回りくどいほど手をかえ品をかえてうったえても底辺はなくなりはない。かんじんなのは、政治の汚点、底辺を改善することによって底辺を温存させるという修正主義ではなく、根本的に底辺をなくするにはどうしたらいいのかという実践行動のプログラムがくまれなければならない。底辺の実態

の分析だけにとどまらず日本独占資本主義経済機構の中で底辺を位置づけ、理論化するという方向にまでつっこんでゆく必要があると思う。そうすれば行動の指針はいままでの不明確から明確に変わってゆくだろう。

根本的に底辺をなくする運動は当然反体制運動の一環として底辺階級(主に未組織労働者)を解放しようとする巨視的な目を持つ必要がある。すると当然底辺と組織労働者との握手をいかにすすめるかという具体的な方法論、組織論にとびこむことになる。

ここをすどおりしては底辺を組織することもなくすることもできない。底辺の会がいまおしすすめている未組織労働者の職業別の全国グループをつくろうという計画の具体化、組織労働者の話し合いを通じて握手するというプログラムは一つの突破口であると思う。しかしこれがただ単なる思ひつきに終らぬように強固な理論武装する必要がある。10ヶ月足らずのうちに九〇〇人の会員を持つにいたった会も、もうそろそろ自己の位置づけと今後の方向、理論と実践との結合を考える段階にきているのではないだろうか。

主体的で自由な発言と討議を通じて矛盾を克服する地点で日本の谷間、暗い亀裂の不気味さを直視してすすんでゆきたいと思う。

(『ていへん』第13号、1961年6月号、底辺の会、2～5頁)

底辺の会への招待

へそのくぼみには渦が
—激動の季節—

なまあたたかい
血が
灰色の空にしたたって
ゆく。
神のへそのくぼみに
青い谷間に
おちこんでゆく。

と
るんると
めざめる
胎児
ガバ シュ
ガバ ガバ ガバ。

へそのくぼみにはうずが・・・
ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる・・・

ああ それは
星雲ではない
ブヨブヨした
胎児と母胎をつなぐ
クダ
クダ。

サイダンするな。
つなげ 強固に
おれのおまえの、
おまえのみんなの
へその緒を
つなげ！

一九六一年三月、おれは底辺の会を機関誌に右の
ような詩を発表した。この詩は直接的
には安保闘争をヒフ感覚で受けとめた結果、生れた
詩であるが、間接的には底辺の会のアナキーな組
織論を欲する衝動から生れた詩である。

この詩をかいた当時、底辺の会は健康そのもので
あった。既成の組織にはないプチプチした新鮮な若
さと強さでいっぱいだった。流動的でアナキーな
未組織の組織であり、既成の組織とはまったく異質
の戦闘集団になる可能性をはらんでいた。未組織労
働者、農民のエネルギーは底しれぬものがあり、こ
の底しれぬエネルギーを組織してゆくことは日本の
変革運動におおきな刺戟源となるだろうという希望
があった。

しかし、会員の増加とともに会の整備という形で
会の固定化、形式化をはかる連中があらわれた。未
組織のエネルギーを既成のピラミッド型組織論で組
織しようというのである。未組織のエネルギーは未
組織であることによって流動的だし、生きている。
しかし、ひとたび既成のピラミッド型組織論で組織
されるとエネルギーは静止し、実体を失い放散して
しまう。あとには実体のない形骸だけがのこる。

このようなことには彼らは盲目だった。彼らには
組織といえばピラミッド型組織しかなく、運動の発
展といえば組織の量的拡大—会員の増加しかなか
った。彼らは運動の質的發展を考えず組織が大きくな
ればなる程、組織内での対立や混乱をおそれ組織解
体を恐怖する組織維持者になった。こうなればもう
おしまいである。底辺の会はもっとニヒルでアナキー
な組織にすべきである。渦まく円環を描く運動体と
して組織すべきである。

おれは新しい底辺運動と工作者のイメージを書
き本部に送った。おれの論文をめぐって賛否両論が
闘われた。機関誌にケイサイするか否か。結局、ピ
ラミッド型組織論者が多数派をしめ、ケイサイする

ことに反対し、おれの論文はほおむられた。

底辺の会も完全に既成の組織と変らぬ実体なきあ
ばら骨集団と化したか！こんなあばら骨集団とはつ
き合えぬ。

おれは底辺の会をおさらばして愛知の田舎で底点
の会を結成した。

《おれたちは世界の底の底のまたその底——鋭く
とがった尖底土器の基底部(底点)に実存する。その
地点こそ日本の全体像を透視できる地点でありあら
ゆる行動の出発点であり原点である。》

底点の会は瞬間に核として創造され、瞬間に点と
して破壊される未組織の組織である。爆発的にエネ
ルギーをくみあげ、爆発的にエネルギーを放射する
集団である。それはピラミッド型組織を拒否する円
環型組織であり、組織の中核は個々の人間主体であ
ると同時に、集団主体である。

森秀人は、解体を恐怖しない、一人一党の純一性
を許容する、孤絶のきびしさによって各自が敵対し
つつ連帯する組織、つまりあらゆる組織性を喪失し
うる徒党というものは、幻視としてしか存在しない
であろうといっているが、それはまちがいだ。幻視
として存在すると同時に瞬間的に具体として存在す
るのだ。底点の会がそうである。瞬間に創造され、
瞬間に破壊される底点の会は、自己の定時的存在を
否定し、その連続的否定の持続に賭けているのであ
る。

口笛ひとつで結集し円環の核となる。口笛は誰が
ふいてもかまわない。各人間主体が孤絶をほこる円
環上の点であり王様である。各人間主体が必要にお
おじ、欲望におおじて口笛をふき必要におおじ、欲
望におおじて結集し核となる。そこで各人間主体が
敵対しつつ連帯し、アナキーな乱舞を開始する。
ケンカとアクシュの交錯する中で突然核は解体し、
各点にエネルギーの全量が回帰する。その連続的否
定の時間の流れの中でおれたちはひきさかれながら
墜ちる。あらゆる方向にマドをひらきながら。

かって、日本全国にサークルというムラがいくつ
も存在したしいまも存在するが、そのムラのマドは
いずれもとじている。主観的に開こうとしてもムラ
が目に見える形の組織と住民登録帳を存在させる以
上、ムラ以外の存在者、住民登録帳に記入されない
無名の人間のエネルギーは捨象され、マドは客観的
にとじざるをえないのだ。ムラの共有感覚は外部に
対して占有感覚とならざるをえないのだ。それをさ
けて全的にマドを開こうとすればムラ(組織)そのも
のの全的否定の上にたった奇怪な組織(組織なき、
登録帳なき組織)を作らざるをえない。

底点の会はそのような奇怪な組織を作ることによつ

てあらゆる方向にマドをひらいている。

《会員はどの位いますか?》とよくきかれる。(会と名のつく以上、数量としての会員が存在するのが当然であるという先入感の上に立った質問である) そういう時、おれは《一人だけだといってもいいし、千人だといってもいいです。いやいや全々ないといってもいいし、無限にいるといってもいい。》と答えることにしている。相手はアインシュタインの相対性理論をきいた時のようにけげんな顔をして《底点の会は会員名簿をもたぬ怪物ですね》と断定してくる。《そうです。怪物です。》とおれはアンドロメダを見ながら答える。《瞬間に創造され瞬間に破壊され瞬間に創造され…自己の定時的存在の無限否定にかける底点の会は弁証法の論理を持つ流動体です。集団そのものが流動し参加主体が流動しています。したがって定型的な組織も会員も存在しません。まさに怪物です。目に見えないところで陰謀をたくらみ突如、具体として都市や村をしゅうげきし、またたくうちに消えうせる山賊です。その顔は夜と昼の二つの顔を持っています。潜在しつつ顕在し、顕在しつつ潜在し、ひきさかれて実存します。いってみれば底点の会は矛盾の集合体であり、矛盾を深め止揚する論理を持つ共同体です。》

共同体は縄文祭を行為することによって現代的に矛盾の止揚の場を持たんと欲する。おれたちは猿投山麓一帯から出土する縄文土器の破片を見ながら縄文祭のイメージをねる。おれたちの縄文祭は人間の持つ全エネルギーの解放の場である。自己から放射されたエネルギーが再び自己に回帰してくるパイプである。生と性のめくるめく乱舞である。感情の共同体から思想、芸術の共同体へと高められる戦闘場である。ここにおいて人間の生はオルガスムスに達する。おれたちは原始時代へのロマンティシズムの浮草的発想を拒否して、原始共同体の持つエネルギーと現代の疎外状況の内に潜在するエネルギーを援用しつつ、現瞬間に賭け、未来へつきぬけんと欲する。縄文祭は瞬間の賭けであり、その持続であり、共同体内部に潜在するカオスの表現である。おれたちは現代的に物質および思想、芸術の共産、共有をめざしてすすむであろう。現的に人間の疎外を解放する場を作りつつすすむであろう。参加を志向するものはいのちがけで参加せよ!

おれたちの戦闘性は革命に際して失うものは鉄鎖のみという実存状況の中から生れる。おれたちは、一パイのコービー代にもことかくのを日常とする人間一働くことを拒否することによって(無限スト)独占資本のしいたルールから自から脱線し、非所有を所有する失業者、無職主義者である。現象的な貧困など問題ではない。たしかにおれたちが失業によ

て得たものは、掘立小屋でこじきのような生活をするのであり(S氏)エロ画をうり美人の妻と二人の子供をかかえてその日ぐらしをすることであり(O氏)自己の蔵書を売ることであり(H氏)生活保護を受けてほそほそと生きること(T氏)であった。(その他etc)しかし、失業そのもの、無職そのものにてつすることによって独占資本のしいたルールから脱線し、非所有の所有を絶望的に深め、疎外から疎外されまた疎外されさらにまた疎外されることによって自からを解放してゆくことにこそ垂直の重みがかかっている。

そのような中でおれたちは社会、芸術、性の革命を志向する。

おれたちは革命—犯罪と破壊行為にかけるだろう。現存する私的所有にかわるべき共産、共有の社会、芸術、性の共同体を求めて。

Kは底点の会を評して《排泄者の集団である》といい、Hは《破壊者の集団である》といい、Mは《犯罪者の集団である》といった。おれたちは、それらの評価を窟こんで受け入れよう。と同時にその評価につけくわえて、次のことを言っておこう。排泄、破壊、犯罪の内部には巨大な建設、創造がかくされているのだ、と。

おれたちは、全日本の文化の創造に寄与するなどといった地方主義者(うらがえしの中央主義者)の体制感覚—センチメンタルな志向を拒否して排泄と破壊と犯罪に賭ける辺地主義者、底点工作者である。排泄と破壊と犯罪に賭けること—これこそおれたちが戦闘の拠点を自己の生産労働の現場に求め辺地(空間的、時間的、精神的、その他あらゆる意味でカオスの存在する地点)に密着し、この乱世を戦闘的に生きぬく道である。

現在、底点の会は、愛知の一辺地に点としてしか存在しないが近い将来、北は北海道から南は九州に至る日本全土に無数の点として戦闘的に出沒するだろう。

(『思想の科学』No.20、1963年11月号、35~38頁)

アンドロメダ運動について

アンドロメダ運動の胚胎とその組織論については昨年《思想の科学》(十一月号)誌上に書き、その時々々の活動については《アンドロメダ》誌上にかいてきたから、そのことについて詳細に書くという事はしない。ここではアンドロメダ運動の基本的な宣伝ビラを提出し、それからアンドロメダ運動の現状をつけくわえて書くことにする。

まず最初に提出する宣伝ビラはアンドロメダ運動をになう縄文人集団(または底点の会)に関するもの

である。このピラによって、あなたはほぼアンドロメダ運動がどんな組織論をもっているか理解することができるだろう。

《縄文人集団は瞬間に核として創造され、瞬間に点として破壊される非定型的幻想的集団であり、渦巻く星雲です。口笛ひとつで結集し、円形の核となります。口笛は誰が吹いてもかまいません。ひとりひとりの人間が孤絶をほこる円環上の主体であり、王様ですから。各自が欲望に応じて吹き、欲望におおじて集まります。そこで各自が敵対しつつ連帯し、アナーキーな乱舞を開始します。ケンカとアクシユの交錯するなかで、突然核は解体し、各点にエネルギーの全量が回帰します。瞬間に創造され瞬間に破壊される縄文人集団は自己の定型的存在の無限否定にかける弁証法の論理をもつ怪物です。集団そのものが流動し、参加主体も流動しています。目に見えないところで陰謀をたくらみ、突如 具体として都市や村をしゅうげきし、またたくうちにきえうせる賊です。その顔は夜と昼の顔をもっています。潜在しつつ顕在し、顕在しつつ潜在し、ひきさかれて実存しています。いってみれば縄文人集団は矛盾の集合体であり矛盾を止揚する論理を持つ共同体です。気がるに参加してください。》(一九六三・十・四)

次に提出するピラは今年の四月行為された縄文祭への招待状である。このピラによってあなたはアンドロメダ運動が何をめざしているかを理解することができるだろう。

《約四ヶ月の激しい討論を経てボクたちは縄文祭を四月三日から七日までやきものの街で有名な瀬戸市でやることになりました。ボクたちはエロスの不在と人間疎外状況を打破し、本質的エロスと人間性を回復する場として縄文祭を現代的に実存させたいと思います。階級的視点と必殺の美学を貫徹しながら。孤絶と連帯を深めながら。ボクたちは“おれたちは飢えている”というあらゆるものに対する飢餓感をバネとして縄文祭を行為します。現在において飢えを起点としないあらゆる行為は強大なエネルギーとはならないからです。ボクたちは縄文祭を行為することによって状況を攪乱し破壊する必殺のパンチをかくとくし、不断の自己否定に賭けるアマチュア戦斗主体(後衛)への道を歩みたいと思います。ボクたちは芸術 政治におけるスマートな前衛(プロ)になることを拒否しつつ、ぶきつちよでどろくさい後衛(アマ)に肉体を沈め、芸術の滅亡—生活そのものに芸術が止揚される地点をめざしてすすんでいきたいと思っています。それが原始共同体内部に潜在

するカオスと現代の疎外状況の内に潜在するカオスを発掘し、現瞬間に賭け、体制を変革し、未来につきぬけることのできる唯一の道だとニヒルに確信しています。縄文祭はあらゆる人に開放されています。気がるに参加してください。一九六四・三・三 縄文人集団》(縄文祭がどのように行為されたかについては《アンドロメダ》(第5号)の縄文祭報告をみてください。)

縄文祭を行為しおわった瞬間 実体としてのアンドロメダ運動はこの世界から消滅した。(アンドロメダ運動は瞬間に組織され瞬間に解体される。)このことを理解できない人々は今なお、瀬戸という陶器の街にアンドロメダ運動が可視の実体として在ると信じ、時々運動を自分の目でたしかめてみよう瀬戸の街を訪れたりする。そして何もみないにもかかわらず《おれはこの目で見た》といい勝手なアンドロメダ運動のイメージを心にデッチあげ、それにむかって非難をあげせたり、お世辞を言ったりする。また関心を持ちながら縄文祭から遠距離にあった人々は4月3日から7日にかけて存在した縄文祭を見ないことをいいことに手前勝手な祭のイメージを作りあげ、それにむかって口笛をならしたり、拍手をしたり、まるでひとりずもうをとっている。彼らお化け相手にひとりずもうを楽しむ連中からアンドロメダ運動に与えられた評価はおおよそ次のようなものである。

① 子供じみた遊びだ。 ② 原色セックスの安売りだ。 ③ 排泄と破壊のナンセンス行為だ。 ④ 芸術を偽装した政治運動だ。 ⑤ きちがいのデモ行進だ。 ⑥ 反芸術のそのまたアンチ運動だ。 その他 etc。

ボクはそれらひとつひとつの評価を拒否もしないがまた許容もしない。彼らにはアンドロメダ運動を誤解する自由と不当に評価する自由があるのだから。しかし次のような注告だけはしておいた方がいいだろう。

自分でデッチあげたお化け相手にひとりずもうをとるということは楽しいことかもしれないが生産性のある行為ではない。もう少し不可視のものを透視すべきではないか。

いまアンドロメダ運動があるとすれば孤独な幻視者の幻想風景の中にしかない。いまはアンドロメダ運動の冬の季節—不可視の世界で祭を幻視し、祭を工作する時である。自立幻視者の禁欲の季節—禁欲の極限に身を沈め、きたるべき日に備えて精力をたくわえ、男根のポッキ力をきたえる時である。一ヶ月前まで(7月から8月にかけて)は、きたるべき日

までまでなくて、予告なしに全裸街頭行進をしたり、24時間男女カンズメ精神肉体ゲキツツ会をひらいたり、突発的宮前広場占拠《レッド・アンド・ブルー実験展》をしたり、アンドロメダ集会を開いたりしていた。(5月から8月にかけてアンドロメダ集会で話し合われたテーマは次のとおり。 ※不良少年の戦闘性について ※近親相姦バンザイ論 ※犯罪の美学と革命について ※革命を結ぶ又は人間の心のとびらをひらくカギをめぐる ※etc。)

しかし9月に入ってから、意識的に地下へ潜入してしまっていて、誰も口笛を吹かないし、姿をあらわさない。ひとりひとり貝の秘密部屋に棲息し、暗やみで祭を夢み、世界を震撼させる大事件を起す陰謀をめくらしているのである。陰謀が行為として顕在化した時、いまは不可視のアンドロメダ運動をあなたは見ることになる。

アンドロメダ運動の今後については予測しがたい。ただ運動の論理に従ってみちびき出されたとおい将来の見とおしはある。それは祭を行為しつづけるながら縄文部落をこの世界に目に見える実体として創るということである。その部落はある時は流浪し、ある時は定着する。流浪しているときは旅芸人あるいは虚無僧のような形をとり、定着するときはキブツ、ヤマギシ会、前森山集団農場のような形をとるであろう。しかし、縄文部落はそれらの集団とはまったくちがった質のものとして姿をあらわし、生きつづけるであろうことはまちがいない。(1964年10月18日受理)

アンドロメダ運動についてもっと詳しく知りたい方は愛知県愛知郡長久手村東島あさいますおまで、ご連絡下さい。
(『三文評論』1965年4月号、三文評論社、29頁)

アンドロメダ 日常的行為を芸術行為に

サークル誌 愛知県長久手村 ※見出し

《アンドロメダ》に集まるうすぎたない狼たちは次々と芸術の花園にクソをたれていった。芸術の花園で女のオシリをペロペロなめたり、同性愛にふけったり、たくわんをコリコリたべたりした。卑俗な日常的行為を芸術行為に変質させていった。

狼たちにとって絵をかいたり詩をつくったりすることもセックスしたり食べたりすることも同じ次元の行為なのであって、すべてはいまを全的に生きるということにかかわっている。

狼たちは命名した、パンティをはくことは芸術だ、

ボクシングをすることは芸術だ、フォックとナイフでトンカツをたべることは芸術だ、赤ん坊のオシリをたたくことは芸術だ。そして狼たちは街頭で、酒場で、路地裏で、美術館で即興演奏の会場で行為した。イメージをつくり吠え生活そのものに芸術を止揚するために。

その行為の残骸が《アンドロメダ》誌であって、狼たちはこのうすべらな機関誌をそれ程、重要視していない。

《アンドロメダ》誌の書き手はマンガ家、詩人、学生、下層労働者、ルンペンなどであるが、会員制をとっていないため人数は不定。二年前に創刊され、現在十一号を編集集中。《芸術とエロス》特集をすることになっている。定価・送料共五十円。

なお政治セックス芸術のゴツ煮になったカオス(祭)のすきな狼たちは、今年の八月、八ヶ岳山麓で《縄文祭》をやる計画をし、現在、暗躍している。
(『日本読書新聞』1318号、1965年8月2日、2面)